

○第3学年

福祉的な活動から、「乳幼児との交流」に取り組みました。1学期に全員が幼稚園を訪問し交流を深める中で、幼児とのコミュニケーションを取ることに難しさを実感し、また、命の尊重を再確認しました。これは自らもまた守られ育まれたことに感謝をすることで、より暖かい人間性の成長を期待したものです。そして、2学期には、0歳から5歳までの乳幼児を招待し、ゲームや絵本の読み聞かせなどで交流を深める活動を行いました。地域の子育てをされている方々や子育て支援センター、保育園などのご協力で、100名近い乳幼児の参加をいただき、大変有意義な一日を過ごすことができました。

様々な形で地域の方々や関係機関、企業の協力をいただき、総合的な学習が学校だけの活動ではなく、地域、そして社会が参加して中学生の成長に協力する広い意味でのコミュニケーション活動になりつつあります。この輪の広がりも一つの大きな目的とし、これからも学習を進めていきたいと考えています。



〔Ⅱ〕小樽市立塩谷中学校での「国際理解」教室 ～喉歌とモンゴル楽器での音楽体験も～

平成19年12月4日、小樽市内もほとんど隣町に近い、塩谷にある小樽市立塩谷中学校（伊藤順一校長。生徒数79名）で「国際理解教室」を開催した。

同校を訪れたのは、北海道庁に国際交流員として勤務している中国黒竜江省政府外事弁公室の張宇さんと、カナダ・アルバータ州政府と北海道との交換研修生で現在北海道大学に留学中のジョーダン・パーティさん、そして馬頭琴と喉歌の演奏家である嵯峨治彦さんの3人。粉雪舞うなか、札幌からJR塩谷駅に到着、担当の先生方の出迎えを受けた一行は、さっそく学校へ向かった。

まだ午前中の授業中で校内は静かであった。生徒たちより一足お先に校長室で給食をいただきながら打ち合わせをするうちに昼休みになり、校内は俄然活気づき3名の講師も準備に入った。午後、体育館を会場に、「国際交流ってなあに?」、「外国人ヘインタビューしてみよう」、嵯峨さんのモンゴル紹介とミニライブを行った。

○国際交流ってなあに?

教室から各自の椅子を抱えて会場の体育館に入場した生徒たちは、まず北方圏センター担当者から北方圏センターのこれまでの活動内容のブリーフィングを聞いて、国際交流について理解を深めた。

○外国人ヘインタビュー

続いて、学年別にマイクの前に進んで、緊張気味に張さんとパーティさんにインタビューを行った。「最初に覚えた日本語は?」、「好きな食べ物は何?」といった質問から「日本に来ていちばん驚いたことは?」など興味津々の質問をしていたが、休憩時間には近くに集まって、握手や腕相撲をしたりとスキンシップを楽しんで笑っていた。

○大草原の音楽を体験しようーミニライブー

後半の1時間は、嵯峨治彦さんがモンゴルの衣装、ブーツに着替え馬頭琴を抱えて登場。自ら撮影したモンゴルのスライドを上映しながらモンゴルの様子を紹介し、「今は国際交流など考えていないかもしれないけれど、何かひとつ関心を持つとその国のことが知

りたくなります」と国際交流のきっかけについて自分の体験を話した。

続いて、馬頭琴演奏と喉歌を披露した。馬頭琴で自作の「森を出た頃」など爽やかなモンゴルの曲をいくつか演奏した。馬頭琴も喉歌も初めてという生徒が大半の中、喉歌のワークショップを実施。ここで、演奏者の「みんな丸一くなって前にきてください」の声で集まった生徒たちは身近で舌や口の使い方方で声を出して歌う喉歌を教わった。

「好きな物や子どものころの遊びなど日本とあまり変わらないのがわかった」という2年生の武者奈央子さんは、日本語での質問に日本語で答えてくれた張さんとジョーダンはすごいなあと思ったと感想を寄せてくれた。また、「モンゴルに興味があったのでモンゴルの景色や暮らしを見せていただいて良かったです。嵯峨治彦さんの馬頭琴と喉歌、二つの音はとても合っていました」。北方圏センターの仕事が世界との交流を通じて様々な文化や情報を伝えあう大切な仕事なのを知ったという同じく2年生の工藤菜太さんは「嵯峨治彦さんは馬頭琴と喉歌でモンゴルの景色や特色、モンゴルの広大な大地と、そこに芽生える生命の息吹の力強さを教えて下さいました」と、今回の交流を通じてそれぞれの国の文化について興味を持ったようである。

喉歌も初めての文化体験ならば、外国人と話すのも初めて。わずか2時間ほどのことではあったが、異文化体験を楽しんでくれただろうか。
(北方圏センター交流部)

